

セッション 1

統一主義の理想社会における平等と秩序

タイラー・ヘンドリックス

## 一 序言

この論文は「歴史と社会」のカテゴリーに入り、統一思想の「倫理論」に関連したものである。この論文の中で、私は、社会の性質や政治形態に適用された統一思想の社会倫理論を発展させようと努めている。

この論文が取り扱う問題は、善なる社会の性質に関するものである。この問題に対する答えは、直接「善」の定義に関連する。一方で、「善」とは「平等」であると定義できるかもしれない。他方、「秩序」であると定義できるかもしれない。現代の民主主義は究極の価値として「平等」が上昇したことの結果物であり、伝統的な君主主義は「秩序」により高い価値を置く。

「秩序」という言葉で私が意味するのは、付随した役割や相互の義務などを伴う地位や関係が安定し明確になっているということである。通常これには、それを維持するための強い権威を必要とするので、その権威を持つ者によって濫用されやすく、その結果、位階制度が階層化し、停滞しがちである。その最悪の場合の結果が、全体主義、広範囲な不正である。

伝統的な意味での「平等」ということで私が意味するのは社会を水平権力の階層化と固定化の消滅である。平等は、個人間の権利や特権が同じようになること、そしてそれ故に権威と社会構造の崩壊生じる。ここで最悪の場合は、秩序や安定した関係と役割の完全な解消であり、それが無政府状態や暴徒支配などを起こす。

君主制は平等を犠牲にして秩序ある社会を樹立する。民主主義は平等を許してきたが、秩序を保持することができない。統一思想は、「秩序」と「平等」の両方ともが善なる社会にとって必要な価値であると考え、一方のために他方を犠牲にしようとはしない。では、統一思想はどのような社会を指示し、「秩序」と「平等」の対立、君

主義と民主主義の対立をどのように解決しようとするのだろうか。すなわち、統一思想は秩序と平等の両方が維持される社会をどのように描いているのであろうか。

この問題を論じるために、まず善なる社会の性質に関して統一思想のいくつかの基本について説明しよう。それから、私は君主主義と民主主義を論じた古典的な表現、すなわち、フィルマー (Robert Filmer) とロック (John Locke) の理論を用いる。ロックによる民主主義の定義および民主主義を支持する彼の議論を要約し、ロックの理論についての問題を指摘し、さらに、その問題解決へ導くかもしれない統一思想の中の洞察を提示する。フィルマーについても同様にし、君主主義に対するフィルマーの定義とそれを支持するフィルマーの議論を提示し彼の理論の問題を指摘し、統一思想の観点から評価するつもりである。結論として、統一社会倫理論の発展のための私の研究の意味を提示する。

## 二 善なる社会についての統一思想の概念

まず、一九八九年夏に出された統一思想の英文草稿 (日本語版「統一思想概要」の英訳) の関連する句節の引用から始めよう。

未来の倫理社会とは……全人類が兄弟姉妹となり、人々が神の愛を中心として互いに愛し合う社会である。

〔統一思想概要〕一九八八年 二五七頁

これが示していることは、統一思想が理想的な「ユートピア」的な理論であるということであり、それは、人間性における根本的な変革、すなわち、罪の除去、および真の（利他的な）愛の普遍的な実践を前提にしている。そこで、本論文は、疎外と犯罪の問題に対する解決を前提とする。それは、もし人間の墮落がなかったとしたら、実現していたであろう理想社会を描こうとする試みである。

神は人間を愛の対象として造られたが、神の愛は人間個人を通じてではなく、家庭を通じてより完全に現われる。（同上二五八頁）

これは、統一思想の社会的な理想が、個人ではなく家庭をその基本単位として、取っているということを示している。家庭は個人に優先し、社会の幸福にとっては、個人の生活を高めることよりも、家庭生活を守り、高めることの方がより重要である。家庭の権威が個人の権利にとって代わるのである。

神の愛を中心として夫婦が愛し合うとき子女が生まれるが、そのとき神を中心として父（夫）と母（妻）と子女の四つの位置からなる家庭的四位基台が形成される……祖父母と父母と子女によって、家庭的四位基台が形成されると見ることでもできる。（同上二五八頁）

このように家庭は、三世代（年長者の寿命および世代周期の長さによっては、四世代以上）的なものと定義されている。

家庭的四位基台の各々の位置には三つの対象がある。……三対象目的の実現は、三つの対象に向かって神の愛を実現するということである。(同上二五八頁)

社会の構造は家庭の構造(三対象目的)から始まるのであるが、家庭の構造自体は統一思想の宇宙論の構造の中に根ざしている。統一の力たる「愛」は、それ自体においては分化されていないが、この根本構造内に現われるときは分化されている。統一思想はこれを「分性的愛」として次のように述べている。

神の愛は絶対的愛であるが、家庭的四位基台における位置と方向性に応じて分性化されて、分性的愛として現われる。分性的愛は基本的には父母の愛、夫婦の愛、子女の愛の三種類の愛である。父母の愛は父母から子女に向かう下向性の愛であり、夫婦の愛は夫婦間の横的な愛であり、子女の愛は子女から父母に向かう上向性の愛である。このように、分性的愛は方向性をもった愛である。正確に言えば、愛には十二の方向性がある。家庭は四位基台の四つの位置において、それぞれ三対象目的をもっているからである。その結果、ニュアンスの異なるいろいろな愛が現われるのである。そしてそれぞれの実現にさいして、それぞれに応じた徳目が必要になるのである。(同上二五八―二五九頁)

かくして、社会および公民の徳目は、すべて家庭内におけるその三種類の愛から推定されるのである。統一思想がいうように、「社会における人間関係は、家庭における家族関係をそのまま拡大したものである」(同上二六

二頁)。これら三種類の愛は、それを拡大した十二種類、またはそれ以上の愛と共に、「分性的愛」と呼ばれる。このように社会が健全に機能するのに必要な徳目は、すべて家庭生活の体験に根ざしており、家庭生活の体験は、神の性質と被造世界の秩序を基礎としている。徳の発達は、個人の完成と本質的に関連した内的な徳目から始まる。統一思想では、こうした徳目の例として「純真、正直、正義、節制、勇氣、知恵、克己、忍耐、自立、自助、公正、勤勉、浄潔など」をあげている(同上二六二頁)。統一思想はさらに次のように説明する。

家庭倫理はすべての倫理の基礎になるものである。家庭倫理を社会に適用すれば社会倫理となり、企業に適用すれば企業倫理(ビジネス倫理)となり、国家に適用すれば、国家倫理(政治)となるのである。(同上二六三頁) (内は本論文筆者の解釈)

統一思想において、政治の領域に関連する「縦的」な徳目は、政府や支配者の国民に対する「愛」と、国民の政府や支配者に対する「尊敬」である(同上二六三頁)。「横的」な徳目としては、「和解、寛容、義理、信義、礼儀、謙讓、憐憫、協助、奉仕、同情」があげられている(同上二六〇頁)。

倫理はまさに愛の位置すなわち秩序において成立する。言いかえれば、倫理は秩序を離れては立てることができない。(同上二六〇頁)

このように統一思想はそれが言及している秩序(体系)の性質を特定することはせず、秩序の問題をとり扱

っている。「家庭は社会の秩序体系の基礎である」(同上二六〇頁)というのである。

家庭は宇宙の体系を縮小した小宇宙体系である。宇宙を貫いている法則が天道であるが、それを理法とも言う。家庭における規範すなわち倫理は、宇宙を支配する天道がそのまま家庭を通じて現われたものである。(同上二六二)

ここでも「体系」という用語が再び現われるが、ここでもそれが、家庭や自然、つまり「宇宙の全体系」と密接につながっているということ以外の詳説はない。また、我々は、万物の基礎にあり、実際万物を治めている「理法」という古典的ストア哲学の概念とのつながりをも見だす。しかし、ストア哲学者とは異なって、統一思想は、神の心情が理法の体系にみなぎり、その体系に価値を与えていると主張している。愛と心情は、被造物と神自身の最高の価値であり最大の力である。それゆえ、各人の最大の熱望は、神の愛と心情との一体化を達成することであり、我々が望む本質的な「平等」とは、愛や心情の領域に関わるものである。この土台の上に、統一思想は、秩序と平等という理論的に(かつ歴史的に)矛盾する価値の問題に答えている。その第一歩は平等の意味を定義することである。すなわち、

統一思想からみると、原理的な平等は愛の平等であり、人格の平等である。なぜならば、人間が真に求める平等とは、父なる神の愛のもとの子女の平等であるからである。それは、太陽の光が万物を等しく照らすように、神の愛が万民に等しく与えられる平等である。したがって原理的な平等は、主体である神

によって与えられる平等であって、対象である人間が気ままに取得することのできる平等ではない。(同上  
二六五頁)

さて、イエスも同類比を用いられた、つまり、太陽は善き者にも悪しき者にも平等に輝く。問題はすべての人々が神の愛を平等に経験するわけではないということである。我々が直面している問題は、すべての人々の間で神の愛を平等に主観的に体験するための条件にかなうと共にそういう体験の結果物でもあるような社会(統治)の体制を確立することである。統一思想は、以下の句節で、このような主観的体験の平等を「愛の充満」と言っている。

神の愛は……秩序を通じて分性的に現われる。したがって愛の平等は秩序を通じての平等である。秩序を通じた愛の平等とは、愛の充満度の平等である。すなわち、すべての個人の位置と個性に合うように愛が充満するときに与えられる平等が、愛の平等である。愛の充満とは満足であり喜びである。したがって原理的な平等は、満足の平等であり、喜びの平等でもある。

このような神の愛の充満は、人間が完全な対象意識——神を信奉する心、神に感謝する心——をもったとき初めて感じるようになる。対象意識を持たない限り、いかに神の愛が大きくても充足感を感じることはず、不満を持つようになるのである。(二六五―二六六頁)

このように、社会問題は、神との関係における人間の意識の問題、また、その人の社会における位置関係との



授受における人間の意識の問題に還元される。統一思想がこの峻しているのは、平等とは各人と神との関係のことであり、個人と神との関係は、社会における他の人々との実践において仲介されるということである。「神の愛は秩序を通じて分性的に現われる」というのは、人間関係の正しい構造は、もしすべての個人がそれぞれの責任分担を果たすならば、神の愛を受けるための土台、あるいは条件となるということを意味する。こうして人間の平等は、人間が正しい社会関係、つまり正しい秩序において生きることによって実現されるのである。それにより秩序と平等は和解せしめられ、実際、決して別々に現われることはない。こうして理論上の問題は解決される（歴史上の問題は応用の問題であり、哲学の目的は世界を变革することである。）

この正しい秩序は家庭の拡大である。統一思想は、外的な結果を明示してはいない。「家庭の拡大」でもって統一思想が明示しているのは、「たとえば二十才またはそれ以上の年齢の差がある場合、年長者は年少者を子女のように愛し、年少者は年長者を父母のように尊敬するのである。また十才以内の年齢の差であれば、年長者は年少者を弟や妹のように愛し、年少者は年長者を兄や姉のように尊敬するのである」（同上「二六二頁」）ということのみである。この統一思想の及ぼす理論の意味は、ロックとファイルマーの理論の議論を通して現われてくるであろう。

### 三 ジョン・ロック

ジョン・ロックはイギリスの哲学者であり、シャフツベリ伯爵の侍医であり、ホイッグ党の創立者であると共に、オレンジ公ウィリアムの亡命廷臣の知人でもあった。ロックは、このような環境の中でその政治哲学を

發展させ、一六八八年に議会の寛大さによりウィリアムが王位を獲得して間もなく、「統治に関する二つの論文」(Two Treatises of Government)を出版した。

ロックは、平等を社会の善の尺度と考え、理想的な、究極的に純粹な平等を「自然の状態」と同等であるとした。ロックにおいては、平等は権利の平等を意味しており、「そこにおいてはすべての権力と管轄権は相互的であつて、だれも他のだれかよりも多く持つことなく、従属も征服もない……。この人間の平等は生来のものであつて……疑問の余地がない……」(Ⅱ四、五)という。我々の平等は「自分よりも他人を愛するという義務」(Ⅲ五)の基礎となるものであるという。それで、平等が愛に優先し、そこにおいては、愛とは他人に善を行うことを意味する。なぜなら、他人は我々と等しいのだから、我々が持つのと同じような(良く扱われたいという)欲望を持っているに違いないからである。「万人が平等であり独立しているから、誰も他人の生命、健康、自由、または財産を害するべきではない。なぜならすべて一なる全能で無限に賢明なる創造主の作品である人間は創造主の財産であり、お互いの喜びでなく、創造主の喜びの間存続するように造られており、同じような機能を与えられ、自然の共同体の中ですべてを分かちあうようになっていたのだから、我々の間にはいかなる……従属もありえない……」(Ⅱ六)。このように、神は我々を平等に造られた。故に我々は互いに愛すべきである。我々はみな神の財産である。従つて、我々は決してお互い同志の財産ではありえない。ここでも、平等が愛に先立っている。

ロックは、「政治社会」とは、各自が自己の人格や財産に対する違反を裁いて処罰する権利に関して法と司法の規則に従つて共同社会に対して署名した人々の共同体のことである、と定義する(Ⅶ八七)。君主の権力とは、君主自身の意思を別にすればどんな權威にもよつても、裁判し処罰しないといった「絶対的権力」のことをロックは意味してゐる。

ロックは、夫、妻、子供、下僕を含む「夫婦社会」から政治社会を区別する。夫婦社会の目的は「種の継続」(VII七九)である。結婚のきずなは、生物的理由で親が子供を育て子供の遺産に備えなければならない範囲まで神聖なのである。(VII八〇)。ロックは、結婚を、男女間の法的契約と見たが、それは契約を結び解消するとき政治社会と結びつく(VII八三)。父親はその家族に対して何ら政治的な権限を持たないとされる。

父親の命令する権限は、彼の子供たちの未成年期の過ぎた後にまでおよぶものではなく、その年令期の規律と支配にふさわしい程度にのみかぎられる。そして尊敬や敬意、されにラテン人が敬とよんでいるすべてのものは、両親に対して捧げなければならないあらゆる援助と防衛とともに、子供たちが、一生をつうじて、またいかなる状態にあっても、必ずその両親に対して負うべきものであるが、それらの義務は、父に統治の権力、すなわち法をつくり、子供たちに刑罰を課する権力を与えない。(VI七四)

このように政治とは權威の問題を取り扱う。すなわち、万人の人格、財産、公民権を守るために処罰する権限を取り扱うものなのである。

#### 四 ロックに対する批判と統一思想の応答

統一思想の見解では、ロックの政治哲学は誤っている。本来の人間のあるべき姿についての統一思想の理解は、ロックのそれとは異なっている。ロック本来の社会を、独立した個人の集合と見た。統一思想は、統一原理の聖

書解釈に基づいて、我々の起源を、原初の夫婦の家庭と見る。統一思想によれば、社会は生物的に家庭から現われてくる。ロックにとっては、社会は個人の集まりから政治的に現われてくる。その結果、「平等」と「権利」という用語に対する統一思想の理解は、ロックのものとは異なっている。統一思想においては、これらの用語は家庭の理想の枠組みの中で定義される。社会的平等と権利は家庭的秩序の脈絡の中にのみ存在する。言い換えれば、個人は、その社会的関係のつながり、家庭的関係のつながりを「自由」に決定することはできない。それ故、政治的社会およびそれと生物的（自然的）秩序との関係に対する統一思想の理解は、ロックの理解とは異った含蓄を持っている。

統一思想とロックとの顕著な相違の図式的な表示については、図を参照されたい。

統一思想	
<p>生物的關係、有機的、自然な關係が第一義的である。</p> <p>神は第一義的に父である。</p> <p>愛に基づいた父母の主管。それは永遠である。</p> <p>家庭を高め、そこに愛と喜びを見出す。</p> <p>アダムとイヴは子供として生まれた、それゆえ成長のモデルとなる。</p> <p>統治は創造の秩序 (真の愛の表現)</p>	<p>人間のお互いからの独立、契約的な關係が第一義的である。</p> <p>神は第一義的に所有者である。</p> <p>義務に基づいた父母の主管。それは一時的である。</p> <p>家庭を否認、そこに手間と負担を見出す。</p> <p>アダムは大人として完全なものとして生まれたゆえに成長のモデルとはなりえない。</p> <p>統治は罪の結果 (利己的な愛を統制するため)</p>
ロ ッ ク	

ロックの民主主義理論にとって重要な問題は、生物的な被造物のとしての人間の存在つまり家庭の秩序との関係である。ロックにとって、家庭は社会の創造に付随したものであった。成熟の年頃までは、親は子供に対して責任を持つが、その後は、親子を束縛する関係はない。その時点で、子供は政治社会に入ることを選択的に選択しなければならぬ。ロックの民主主義においては、社会生活は任意的なものであり、政治的な性質のものである（つまり、交渉に基づいて同意を得なければならない）から、個人の社会における立場は、家庭的（すなわち、生物的）つながりによってではなく、その個人の意思によって決定される。従って、統一思想は、ロックは「単独の個人を思考の全体のかなめにしている」「バーク（Baker）. xix」という伝統的な批判に加わることになる。事実、指摘されているように、ロックは「自然法」を賞揚するが、彼の理論の含蓄は、いかなる「自然の状態」そのものにも何ら現実的な存在を認めない。すなわち、「ロックの自然の状態とは、認められた権利の体制をもっており、すでに一つの政治的社会なのである。」それは性もなく、家庭もない大人つまり、以前あるいは後代の生物的關係や責任のない、浮き草のように流れ流れている原子からなる世界なのである。（統一主義者にとって興味深いのは、この世界が天使の世界に似ているということだろう。）

個人が夫婦社会（自然の秩序）から政治社会へ移行するところでは我々は、ロックの理論に質問することができる。ロックは各人は積極的な同意を通して政治社会へ入っていくと理論づけているが、大半の人々は、暗黙の同意によって、すなわち法律や習慣を受け入れ、領土に留まることによって、政治的社会へ入っていくということも認めている。実際のところ、大半の人々は、市民社会を必要な制度として受け入れたからこそ、そこにかかわるのである。政治的社会の正しさに対する実際の「同意」がないのは、子供が家庭の正しさに対して「同意」することがないのと同様である。ロックの言う「暗黙の同意」とは、我々がしばしば不愉快にであっても実

際は自然だとして受け入れるところの与えられた秩序に人間が開化されて入っていくことの婉曲な表現である。すなわち、大部分の人々は、自分自身の文化を自然で絶対的なものと考える。子供は家庭生活の状況を自然に受け入れるし、大人もまた、彼らの歴史的な社会生活の状況を自然に受け入れる。それは理性や判断を通して到達する決定ではない。それはロックの意味における政治的行為であるのではない。従って、ロックの「政治社会」は神話なのである。

ロックが（非自発的なものとしての）夫婦社会と（自発的なものとしての）政治社会を二分するのは誤っている。ロックのいう政治社会の「メンバー」とは、メンバーとなることを積極的に選択する人々、すなわち政治家たちのみである。政治は自発的な結びつきである。個人はだれも（領土を離れることがなければ）社会から真に離脱することはできない。そこを離れない人々はその政治体制の一部に――犯罪人のように――留まる。同じように、いかなる個人もその家庭から脱退することはできない。人は常に自分の親の子供であるし、人は常に自分の国の産物なのである。

これから述べるのは、ロックが政府の形成における文化の役割を無視しているのを批判しようとするものである。これは理性の機能における習慣や伝統の役割に類似している。習慣や伝統には有機的、歴史的な生命があるが、その本質は家庭を通して伝達されるのである。我々は、このような環境から自分を切離して、成人に到達するやいなや、歴史性のない打算的な純粹理性の存在、政治社会と呼ばれる全く別の次元の生活に今や入ることのできる存在に突然なるものではない。政治的生活は、文化、経済、道徳、宗教、技術などを含む社会の複合体の一面である。文化は相対的に自然的である。ビジネスマンがオフィスへ行くのに、背広を着ないでテニス用の半ズボンを着て行くような選択はできないという意味で、文化の領域にはあまり多くの、選択できる行動はない。絶

対的で変わらぬ実体——それを通してあらゆる形の文化が維持されている——は家庭である。

ロックは、政治社会を自然の法則から分離する。なぜなら、家庭は自然の秩序であり、政治社会は夫婦社会から切離されているので、政治社会は自然から切離されている。統一思想は、家庭をより大きな社会と統合し、それ故に、人間社会を自然と統合する「自然の法則」に対する新しい理解を提示することによって、この問題を解決する。家庭とより大きな社会の目的は同じである。すなわち、人間の喜びと神の喜びを充足することである。より大きな社会を創造する大人たちは、皆同時に家庭にも関係している。もし家庭が理想的なものであれば、大人たちは幸福で満足するであろう。彼らは神の愛への対象性を通して喜びと満足において平等であるであろう。平等は家庭にその基礎を持っているのであって、より大きな社会的機関自体にその基礎を持っているのではない。家庭において、神の下での喜びと満足において平等な個人は、当然より大きな社会の中で正しい状態を創造するであろう。彼らは、隣人を傷つけることは決して望まず、隣人の益となるために働き、また分性的な愛の表現に従って関係を持つことを望むだけであろう。それ故に、ロックが定義するような社会は不要である。なぜなら、法律や裁判官や処罰の必要はないだろうからである。

ロックの理論のもう一つの弱点は、人間の因習に従って、人間の手に生死に対する絶対的な權威を置いていることである。人間の因習によって支配される社会は決して安定したものとはなりえない。何故なら、人間は常に、他人が決定したことに對しては、たとえ多数決で決定したものであっても、疑問を提起し得るからである。いかなる者でも、暗黙裡に、またはそれ以外の仕方でも、同意を拒否しつつ、多少の程度まで「法の外に」生きることを選ぶことができる。絶対的な基準、つまり、人間レベル以上の權威がなければ、本当の安定や秩序は決してないであろう。



統一思想は、夫婦の愛を中心として家庭の中に絶対的な愛を確立する。ここから、父母の愛と子女の愛という絶対的な価値が現われ、またここから健全な社会に必要であると共に、健全な社会を通して現われる多くの解く目が確立される。ロックにとっては、夫婦の關係は、子供を産むことに対して相対的であった。それが十分に(財産相続の時点まで)達成されてしまえば、結婚は何らそれ以上の意味や価値を持たないものであった。それ故に、ロックは何ら絶対的なものをつきとめなかつたのである。彼の最高の価値は(理論上の)自然の状態において所有される独立と平等なのである。この二つはどちらも絶対的なものではない。独立は私が依存しているかもしれない物や人に対して相対的に存在するし、平等は他の個人や集団の状態に対して相対的に存在するからである。

ロックは我々が關係的な宇宙秩序の中に存在していることを認識しなかつた。彼はニュートンの世界觀の申し子であつたが、この世界觀においては、事物は影響されることなく互いに影響しあうことができるし、またこの中では、位置と時間と速度が絶対的なものと考えられた。ニュートンの宇宙觀は、すでに關係(すなわち相対性)を出発点とする説明に取って代えられてから久しい。この理論は、物理的な宇宙に関して我々を啓発してきているが、今や社会理論にも適用されなければならない。

關係的な宇宙秩序の中では、絶対的なものは關係まさにそのもの以外の何物でもないかもしれない。世界の中心的な關係は、神と夫と妻のあの複合体である。その關係の中で、天上、地上のすべての關係が結びつきバランスを取り、調和している。それ故に、秩序(安定性、不変性)の中心は、夫婦の社会、家庭たるしかない。

家庭は統一思想において社会を解釈するものとされているが、ロックにおいては政治社会が家庭を解釈するものとされている。統一思想における家庭の目的は、愛と喜びの土台たることであり、愛が永遠であるが故に結婚も永遠であり、財産は分有され、所有は法律上の問題とはなっていない。民主主義社会にとっては、家庭は私的

な法的機関、市民をを産出するものであり、政治的な責任に到達するや否や、個人はそこから分かれていく。

統一思想は、これとは異なる家庭観を根拠づける根本的な人類学をもっている。ロックにおいて、他人への愛は自己愛に根ざしている。我々は他人を愛する、それは我々が彼らを自分と同等であると認めるからである。それ故、我々は自分を愛するように他人を愛すべきだということになる。統一思想における他人への愛は力そのものである。事実、統一思想はロックとは反対である。すなわち、自己愛は他人に対する愛に根ざしているのである。

統一思想においては、他人への愛は所定のものであり、ロックにとっては、市民（政治的）社会は他人の悪から我々を守るためにのみ生じたものであるから、ロックの意味における政治社会は、本来の社会の一部ではない。それで、ロックの理論において置き去りにされているのは「夫婦社会」である。

ロックは「夫婦社会」のモデルを「拡大」しない。なぜならば、彼は政治社会を根本的なものと見て、夫婦社会は種を維持するために一時的に各人の人生において存続する、ほとんど変体ともいえる例外的なものと見ていくからである。彼は、夫婦生活にそれ自身の活力や高潔さを与えることをせず、個々の人間を造り、教育し、世代を通して財産の所有権を秩序ある仕方でも維持してゆくための手段とのみ見るのである。

統一思想によれば、家庭生活のこうした機能は、外的または形状的な機能である。ロックは愛を中心とした家庭生活の内的または性相的な要素を認識していない。ロックは、その政治理論の視野からのみ家庭を見、したがって家庭の意味を政治的な観点内に限定し、その生物的、経済的な役割を全うする否や、その意義を解消させる。このような狭い見解は、一六八八年の議会の革命のための彼の政治的な日程のためにロックにとって必要なものであった。家庭は社会の構成要素であり、そこにおいてはロックの定義による平等、すなわち政治的平等は決し

て出てくるはずがない。それ故、彼は家庭を単に、人々を政治的社會にもち込むための手段とのみ定義したのであった。

さらに、ロックは（少なくとも彼の著作においては）家庭生活を会得していなかった。自分の子供の世話をするのには、子供が「その面倒をやわらげることが出来る」分別ある個人になるまで、「親に課せられた義務」である（「VI 五八」）。子供がその親を重んずるのは、「神と自然の法」によって彼らに課せられた「義務」である（VI 六六）。この厳しさを和らげるため、ロックは「神は、親があまりの厳格さをもってその力を行使する恐れがないほど、子に対する優しさを人間性の原理の中に織り込んだ」と付け加えている（VI 六七）が、これは、統一思想が第一に位置づけているものをロックは第二義的に位置づけていることを表わしている。問題はロックや統一思想が現実の事実を廃除していることではなく、それぞれの第一原理の識別、およびその持つ意味合いである。

今日の西洋民主主義は、その基礎となっていないロックの理論のこうした弱点を証拠だてている。家庭は崩壊してしまっており、男も女も、家庭をおもにも、もし条件が満たされなければ、裁判所の審判を通して壊れるかもしれない契約によるきずなど見なしている。このように、人格や財産を侵害するものを裁き処罰する市民の権利の公的領域に対する疎外が拡大して、結婚や家庭の関係をも含むようになってきている。家庭が政治化されてきたのである。従って、家庭は自然の秩序、必然的な人間関係とは見られていない。家庭の崩壊と共に生じつつあるのは、全体的な社會の崩壊であり、西洋民主主義の内部からの破産なのである。

## 五 ロバート・フィルマー

ロバート・フィルマーはイギリスの貴族で、彼はロックより一世代前の、ピューリタン革命の直前の時代に生きた人である。ロックが議会の擁護者であったのに対し、彼は国王を擁護した。ロックの二番目の論文に先立つと見られた第一の論文は、現在発見するのが大変困難である。このロックの最初の論文は、フィルマーを批判したものであった。ロックの後、ほどなくしてフィルマーの著作は忘れられてしまった。しかし、フィルマーをまとめることによって、我々は西洋の伝統の中にロックに代わる意義深い理論的代案があることがわかるのである。

フィルマーは、当時の民主主義の理論家たちが權威の根拠を人間の因習や人間の意思においていることに対して、壊滅的な批判を浴びせた。ロックとフィルマーの両者についての權威であるピーター・ラスレットは、ロックを含めて誰もフィルマーの民主主義の批判に答えていない、と述べているが、このことはフィルマーの名前と著作全体の無名さに関連して、考えてみる価値のある事実である。

フィルマーは君主主義の定義とそれを擁護する議論を提示した。彼は人類の最初の父母であるアダムとエバが存在したという推定から論じた。神はアダムに妻と子供に対する統治権を与えた。アダムは神を代表しており、被造物の主であった。アダムのこの支配は、彼の孫およびすべての子孫を含んでいた。かくして、アダムは彼の血統たる全人類の先祖であり王であった。

アダムの權威の基礎と理由づけは、生殖という生物学的事実であった。このように、フィルマーの見解によれば、人間は生まれて自然の生物的きずなによって立てられた社会的な脈絡の中に入る。フィルマーは、父権が自然の中に存在する唯一の眞の權威であると論じた。それ故、すべての權威は家庭から始まる。政治的權威は、彼

によると、自然を通して神によって与えられた秩序である家庭と血族を通して、創造される人々の自然の結びつきに由来し、それに一致したものでなければならぬと彼は論じた。フィルマーにとって、政治的權威の起源は、神以外にはありえないのである。

フィルマーの理論の中で暗黙裡に主張されているのは、秩序の擁護である。というのは、彼の目的は人間は、「大衆の裁量に従って与えられた人權によって、自らが望む形態の政府を自由に選べる」(Ⅰ)という考えに反論することであったからである。フィルマーによれば、統治の形態は一つしかない。それは神によって自然を通して家庭に与えられた原の形態なのである。

それ故、私はアダムの子供たち、または他の誰かの子供たちでも、その親への従属からいかに自由でありうるのか理解できない。子供のこの従属は、神自身の命令によるすべての王の權威の源泉である。ここから、公民の権力は、一般に神の制定によるばかりでなく、それを特に最年長の親に割りあてることまでも、神の制定によるのだということになる。(Ⅲ)

フィルマーはさらに、いかにしてこの主権が生死に対するその權威において「絶対的」であるかを論じている。このための彼の議論は、すべて旧約聖書から来ている。「創造によってアダムが全世界に対して持った、そして彼から伝えられた権利によって族長たちが享受した一人の創造以来存在してきた、いかなる君主の絶対的な支配権にも劣らず大きいものであった。」(Ⅲ) 君主の権利は、より大きな規模では、「父の権利がその眞の相続人に下されてきたものである。」(Ⅲ) ここでもフィルマーの重要な言及は創世記一章二十八節である(Ⅲ)。これは、「すべての

統治と礼節の源泉としてのアダムの自然で私的な支配権であり、諸王の権力はアダムの元祖の支配権に由来するのである」。(IX)

フィルマーは、解消可能な主人と僕の関係と、決して放棄できない父子関係とを区別する。前者は「隷属」であって自然法に反する。なぜなら「何人もしもべとして生まれたり、自然法によって主人の力に従属するように生まれてはいない。ただ万人は父の力に従属するように生まれている」(X)からである。フィルマーは反対者たちに対して、「息子たちはどのように、いつ自由になるのかを我々に教えよ。私は自然法によっては何の手段も知らない」と要求するのである(XI)。

このように、フィルマーは家庭と血統のみを基礎にした階層的社会を擁護して論じている。それ以外の基礎による人間の間の不平等は、それが社会的なものであれ、政治的なものであれ、経済的なものであれ、人種的なものであれ、強制的なものであれ、問題外に除外されるのである。

## 六 フィルマーに対する批判および統一思想の応答

このようにフィルマーは、自然な秩序(生物的、家庭)と政治的秩序(人工的、国家)というロックの二分化には陥っていない。このように、形状面に関して、ロックよりもフィルマーの方が統一思想により一致している。しかし、ロックと同じくフィルマーも親の權威の性質を誤解している。

まず第一に、フィルマーは親の權威の基礎を父親のみに置いている。統一思想は權威は母親にも与えられており、母親の權威はユニークなものではあるが、父親の權威と同じように重要であるとしているのである。

第二に、統一思想においては、親の權威は愛の權威であつて、(生と死に対する) 強制の權威でもなければ、神の命令によるものでもない。もちろん、統一思想においては、神の命令はあらゆるもの前提条件であるように、親の權威の前提条件でもある。しかしながら、親の愛には神のみ言葉の実体化があり、それを統一思想は、自然で、かつ必要なものと主張している。実際、そしてまたこれが統一思想とフィルムマーとの違いの鍵なのであるが、人間墮落の第一の結果は、親の愛が歪んだということであつた。原初の父母は、その子供たちに対して神の愛を实体化することができなかった。このため、彼らは力と人工的な權威によって支配しなければならなくなり、子供たちは不幸となつたのである。

フィルムマーの主要な誤りはこういうことである。すなわち、彼は、人間の墮落と親の愛との關係がわからなかつた、したがつて人間の墮落と生物学的な家族や社会との關係をも理解しなかつた。彼は、墮落した親を規範として受け入れ、墮落した親に絶対的權限を与え、墮落した親が利己心、および眞の愛を子供に与えることのできないことから取る実力行使のような現実的な特權を承認したのである。

フィルムマーのモデルは、墮落世界から導き出してきたものであつたので、人間の利己的な性質を考えると、特に夫婦生活においていくつかの点で恐るべきものとなる。墮落世界における究極の父親としての国王のモデルは、せいぜい良くて一時的な処置であり、最悪の場合は壊滅的なウソとなる。アダムは墮落の故に、世界には眞の父親がいなくなった。いかなる男性も自分の妻に眞の愛の主管をすることができず、いかなる親も自分の子供に眞の愛の主管をすることができなくなった。父親的な主管は、精神的あるいは物質的な力の問題に還元されてしまつた。同じように、世界には眞の母親がいなくなつた。夫に対する妻の主管も、また等しく破壊的で悪なるものとなつた。王の權威は血統を通して受け継がれてきたとする考えが教世紀前に廃止されたのは良いことであつ

た。悪の血統をあがめ、守り、永続させる必要はないからである。

人がもし墮落世界の状況を受け入れ折合いを求めるならば、ロックノ解決策はありうる最良のものだと論じることができよう。父母が調和と正義を作り出すことに失敗したとき、兄弟は愛の支配の可能性を捨ててその代わりに抽象的な理屈を置きながら、自分でやりくりしていかなければならない。その結果が理性的で、多くの人々が「心情のない」と言う、英語圏の民族の世界であった。

統一思想は、個性の完成を結婚や家庭生活の前提条件として設定することによって、この問題を解決する。それ故、夫と妻は無私の愛の個人となるべきであり、そうすれば神の愛をお互いに、そして子供たちに対しても伝え、実現することができる。統一思想においては、子供たちは自然に自発的に親を愛し、決して別れることを欲しないということが暗黙裏に示されている。そのような愛の世界の中で、兄弟姉妹は互いに愛し合い、決して別れることを欲しないであろう。このように、真の父母の愛こそ、ロックが彼の望みの基礎としている「兄弟の一致」の前提条件なのである。

そのような社会では、当然、最年長の夫婦が神の真の愛の權威を代表するであろう。これが神が本来意図した、神の愛によって支配される世界であり、そこにおいて喜びと満足の平等、および天道の秩序の両方が完全に実現されるのである。

## 七 結論

私は、ロックとフィルマーの両方に対する批判の基礎を、彼らの家庭生活に関する誤った考えに置く。つまり、



ロックに関しては、家庭生活と社会との関係、フィルムマ<sup>①</sup>に関しては、親の心霊的な責任について誤っていた。それで、統一思想は、結婚する前に男性と女性が、神が完全であられるように完全なものとなる（マタイ伝5/48）責任があるという点に関して、フィルムマ<sup>②</sup>を補うために、ロックから個人的な責任と誠実さの必要性に対する強調を借りている。また、統一思想は社会的な権威と平等の基礎を、ロックを補うために、家庭を中心として自然の秩序の中に置くことに關して、フィルムマ<sup>③</sup>の強調点を借りてきている。

フィルムマ<sup>④</sup>と同じく、統一思想は、政治的な権威の基礎を自然の秩序、特に家庭の中に置いている。「家庭は宇宙の体系を縮小した小宇宙体系である。……家庭における規範すなわち倫理は、宇宙を支配する天道が……縮小して現われたものである」（統一思想概要二六一頁）。統一思想は、さらに進んで社会における秩序の基礎を愛の平等として概説している。すなわち、万人は愛し愛される「権利」を持っている。その権利が充足されれば、万人は真の喜びを感じるであろう。「誰もが自己の位置を維持するものと期待されているが、その特定の位置で喜びと満足を感じるのである」（同書二二九頁）。平等とは実質的に「満足の平等」のことであり、従って「愛、人格、喜び、幸福」の平等のことなのである（同上二六五〜二六六頁）。

統一思想の思考の中で暗黙裡に示されていることは、愛の起源は精神的には神であり、実質的には親であるということである。それ故、万人は、自己の家庭生活を通して根本的な平等を達成するのである。それ故、民主主義の核心は、天的家庭の設定である。夫と妻の間の真の愛の種から家庭が創造される。家庭はまさに精神的にも物質的にもその愛の拡大または拡張である。同様に、氏族は家庭的愛の拡大であり、社会は氏族的愛の、国家は社会的愛の、世界は国家的愛の拡大である。例えば、諸国が兄弟姉妹としてお互いのために生きるとき、世界が創造される。真の愛は、自然に、曲げられがたく、個人から世界的基準へと拡張する。

五  
...

統一思想は、神の国というキリスト教の理想、すなわち神中心の愛が実現される社会をなし遂げるための手段を提供する。アウグスチヌスはこれをなし遂げることができなかった。なぜなら、彼は、真の家庭が天上（または希望上の）天国と地上の現実の天国との連結点であるということを認識する基盤を持っていなかったからである。真の愛は絶対的であるが故に、神はすべての家庭に等しく臨在するので、各家庭は絶対的であり、絶対価値を持っている。ロックが個人に帰した公民権を、統一思想は家庭に帰そうとする。個人は絶対的ではない。なぜなら、神は個人の中には十分に臨在されず真の結婚と家庭生活の中に十分に臨在される。それで、神は、究極的な、人間的な意味で、ダイナミックで創造的なものとして現われるのである。各家庭は絶対的な愛、真、善、美の相対的で完全な中心である。そのような家庭を構成する個人は、当然、真の愛の人々であり、キリスト教的な表現で言えば、神の霊に従って生き、律法を越えている。アウグスチヌスは、そのような人々にとっては律法（およびアウグスチヌスの意味での罪を統制するための政府）は必要ない、と言った。なぜだろうか。それは、神の霊によって生きている人々は、当然、他人や社会全体のために行動するであろうからである。そのような人々は、当然、受けるよりもっと多く与えるであろう。すべての人々が受けるよりもっと多く与える社会は、靈的、文化的、経済的に富にあふれている。すべての人々が、そうせよと命令する法律があるからではなく、表現で言えば、自分自身の欲望からこのことをしているのだ、これは絶対的な自由と完全な秩序の社会となるであろう。

アダム・スミスから学説を借りるならば、万人が他人の必要に奉仕することによって彼ら自身のために働いている、絶対的な自由の社会においては、神の「見えざる手」が秩序（均衡、構造、ネットワーク、位置、および関係）を立てるであろう。秩序の基礎は、人間の理性や交渉、契約、憲法、計算ではなく、真の愛であることを私は統一思想において提案したい。（理性その他は、本心の力として形状レベルで依然、作用しているが、それら

はセルフインタレストに奉仕しているのではなく愛の原理に奉仕しているのである。従って、統一主義の実践的な議題は、理想的な社会秩序を設計することではなく、我々自身が理想的な家庭をつくり出すことのできる真の愛の人間となることなのである。

この点において、統一思想はロックに共鳴する。ロックは、成熟に達するやいなや社会契約を結ぶ人々を責任ある個人と見た。統一思想は、成熟に達するやいなや祝福を受けて結婚する人々を責任ある個人と見る。統一思想にとっては、結婚することは社会に入ることでもある。それで、家庭生活と社会生活は切り離せないものなのである。そのようなものとして個人の責任は、まず、理想的な家庭を通して、家庭秩序の責任あるメンバーとなり、かくして平等の基礎である神の真の愛を引き継ぐのである。第二に、その土台の上で、個人は社会のメンバーとして責任を持って行動し、家庭内の真の愛から推論される徳目の実践を通して、良き社会秩序を確立するのである。

第一セッション論文へのコメント

米フロリダ州立大学  
リチャード・L・ルーベンスティーン

タイラー・ヘンドリックス博士は、統一思想の社会倫理論についてはかりでなく、現代の家庭の危機の哲学的かつ精神的な起源についても、啓蒙的な論文を書いてくれた。しかし、ヘンドリックス博士も指摘しているように、「統一思想は人間の性質の根本的な変革、つまり罪の除去を前提とした『理想主義的、ユトープイア的』な理論」である。これは、私が何らイメージを形成することができない統一思想の重大な特徴となっている。私は文師を大いに賞賛するが、私が生活している世界は、贖われていない墮落の世界である。私は私の経歴の大部分を、二十世紀に人間が犯した暴力の研究に捧げてきたので、やや暗い時期において、私は虐殺や大量殺人という不幸な題目に関して権威であると言うことができる。ユダヤ教神学の枠組みの中でさえ、私は人間性に関して規範的なユダヤ神学の穩健な楽観主義を拒否する立場を取り、原罪についてはキリスト教カルビン主義の教義に相当するユダヤ教の教義を擁護してきた。さらに、私は、善なる社会とはどのようなべきかについて、ヘンドリック博士と多く——全部ではない——に関して一致している。時どき、善なる社会は大変長い期間にわたる漸進的な改善の問題であるかもしれないと思うが、またある時には、善なる社会を達成しようとする努力は、ギリシャの英雄シシュフォスが、激しい苦痛の中で非常に重い石を丘の上に転がしながら上げるようにと運命づけられるが、結局、その石は繰り返して丘から転落するのを見る、そのような労役とあまり違わないではないかとも思うのである。

統一思想に従って、ヘンドリックス博士は、社会構造は家庭構造をもって始まると考える。統一思想を引用しながら、彼は「家庭倫理はすべての倫理の基礎と見ることができると考える。この見方と一致して、彼は、社会構造の起源としての家庭に対する二つの大変異なった見方、つまりロバート・フィルマー卿とジョン・ロック

の見方を引き合いに出す。それから彼は統一思想が彼らと一致しているところと一致していないところを示す。

ヘンドリックス博士がロックとフィルマーを選んだことはどちらも賢明であり有用であると思う。フィルマーは絶対君主制への深い擁護を示す一方、ロックは民主主義の最も大きな影響力をもった哲学的表現を示した。ヘンドリックス博士が指摘しているように、PATRIARCHA において、フィルマーは君主制の權威を、神がアダムに与えた支配權から引き出している。アダムは、自分の直接の家族に対して、また究極的には人類に対して、絶対的な王權を持っていた。フィルマーによれば、王權の絶対的な權威が由来するのは、我々の最初の先祖の家父長的な權威からであるという。このように君主制は家父長制の家庭の延長であり、またその現れでもある。君主の權力は、最初の父親の息子に対する生死にかかわる權力から由来している。これらの權力は「去勢する權力と傾向」を含んでいる。国王との関連において、臣民は子供であり、そのごとく振る舞わなければならない。こうして、フィルマーは政治權力と父親の權力とを同一視しているが、これには統一思想も部分的に同意する。

一六八八―九年の名譽革命の結果において、フィルマーの絶対君主制の擁護は英国では受け入れられなかった。民主的な平等に、より合わせたジョン・ロックの政治秩序の擁護の方がより適切であった。ロックによれば、フィルマーが取り上げて書いた父權は「奇妙な種類の支配の幻」であるという。ロックによれば、父權ではなく、兄弟愛が根本的なパラダイムであるという。「兄弟は友好と平等の名前であり、裁判權や權威の名前ではない」。さらに、ロックは、すべての人間は「一人の全能で、無限に賢明な造り主の**できばえ**」であるから、我々は互いに害を加えないよう義務づけられている。しかし、ロックにおいてヘンドリックス博士が言及していない要素がある。つまり、ロックは地上の親の立場を否定する。ロックにとっては、一人の**眞実の親のみ**があり、それが神である。親はロックにとってせいぜい子女の保護者である。「父親の命令權はその子供の未成年期より先には及ばな

い」というのもそのような理由からであり、フィルマーの家父長的な支配とは異なり、ロックの父親は「その子女を治めたり……法律をつくったり、子供に罰（科料）を要求する権限を持っていない」。フィルマーの家父長が神の権力を仲保するのに対して、ロックにおいてはなんらそのような仲保はなされない。

ノーマン・O・ブラウンによれば、ロックとフィルマーとの論争は「二人の巨人の形態」、つまり、永遠に繰り返される、二つの典型的な、人間社会の組織方法——父権的方法と兄弟愛的方法、家父長制的方法と兄弟愛的方法——の間の論争である。我々はアリストテレスとプラトンにおいても同じ論争を見いだす。統一思想のように、アリストテレスは国家組織を家父長制の家庭が組織される際の原理と同一の原理の現れと見た。ブラウンは、ヘシオドスを引用したアリストテレスを引用している。つまり（まず）「家屋と妻と雄牛、次に多くの世帯が村として組織され、村々はポリスとして組織される」。それぞれのレベルで、家父長制の家庭は支配権や支配のモデルとなっている。君主制は最初の統治形態と見られる。なぜならば、「家庭は君主制的に治められる」からである。しかし、「家庭を結びつけるきずなは『分性的愛』であり、夫婦と父母と子女の愛は究極的には神の絶対的な愛から来る」としている統一思想とは違い、アリストテレスにおいては、統治の本質は、それが家庭においてであろうとポリスにおいてであろうと、支配であり、男の女に対する、また親の子供に対する、また主人の奴隷に対する支配であるとされている。アリストテレスからフィルマーおよびそれより先には明白な継続性がある。

プラトンはもう一つの典型、つまり兄弟愛という典型を肯定する。ブラウンによれば、プラトンは決して家庭に言及しておらず、実際、彼の理想国家はその撤廃を必要としているのだという。統治原理としての家父長制と兄弟愛との闘争は、またアテネおよびスパルタの大いに異なった構造においても見出だされた。家父長制と君主制に対するアリストテレスの強調は、アテネの社会的な現実に呼応している。一方、兄弟愛に対するプラトンの

強調は、スパルタの社会的な組織を反映している。プラウンは十九世紀のフランスの社会学者フュステル・ド・クルランジエを引用しているが、クルランジエはギリシャおよびラテンの都市や宗教を家父長制の上昇する秩序という表現で描写したが、スパルタを自らの（理論）体系に当てはめることはできなかった。スパルタに関して、クルランジエは、ドーリア人の侵略時に「もはや彼らの間に家庭というこの古い組織を我々は判然と認めない。我々は、もはや家父長的な統治の痕跡や宗教的な貴族や世襲の被護民の立場のなごりを見出ださない。我々はただ国王の下にあるすべて平等な戦士を見るだけである」と述べている。<sup>8)</sup>

家父長制と兄弟愛との同じ闘争は、フランスおよびロシアの革命にも見いだされる。そこにおいて「自由と平等と博愛〔兄弟愛〕」に基づいた社会を創建しようとする試み——究極的には成功しなかったが——のために国父（国王）の殺害は必要な前提条件となっている。

宗教でさえこの典型的な二元論を呈していると見られる。ユダヤ教にとって根本的な宗教問題は、人間が、墮落以後、いかに神に受け入れられるような神との関係を達成できるかである。ユダヤ教の規範的な解決方法は、聖書的な契約に表現されているように、またユダヤ教の権威ある教師や予言者、賢人およびラビ達によって解釈されているように、（天）父の意志に対する妥協なき従順であった。ユダヤ教は、明らかに家父長的であり、統一思想においてなされているほど神の絶対的な愛を強調してはおらず、墮落世界において神に従う必要性を強調している。さらに、ユダヤ教には、神と人間との関係を叙述するのに、父権ではなく王権や支配権という政治的モデルを強調する大変強い要素がある。シナイにおける契約そのものを参照しよう。現代の学識によれば、この契約は、そもそも紀元前十四—三世紀のヒッタイトの宗主権協定にならったものであり、そこにおいては、ヒッタイトの宗主がその配下の小王に条件的な保護条約を与え、彼が所有し与える利益と（従者が不従順であることがわ



かつた場合にはその後引き続き起る）悲惨な処罰とを共に明示している。従者の対応は、条件的な自己呪いを身に引き受ける、つまり、自分たちがその合意に対して不誠実であることがわかれば、宗主の神ではなく、自分達の神々に、自分達自身を最もひどく罰するようにと祈って、宣誓（する）というものであった。この協定は重要な目的を果たした。古代の中東のそれぞれの政治的共同体は、それぞれの神や女神をかかえた宗教政治的な単位であった。互いが共通の家族的つながりや宗教によって結ばれているとは見ない諸共同体の支配者は、そのような形式的で人為的で契約的な取決めによって、初めて古代の政治的な諸単位間で信用できる唯一の類いの合意、つまり宗教的に正当化された合意を受け入れることができたのである。単純に言うると、従者は大君主に対して事実上「我々は共通の神を持っていないので、あなたの神ではなく私の神により、私はあなたに無条件の忠誠を尽くすことをお誓いいたします」と言ったのである。

シナイにおける契約も大変似た目的を果たした。それは本来、宗教政治的な慣行であったが、これは、以前に、親族関係や伝来の宗教伝統をも共有したことの無い諸団体に対して、新しい道徳的な義務を負う一つの共同体を造るのに役立った。出エジプト以前の「ヘブル」という名前は、エジプトにおいて共通の（生活）状況や社会的な地位、つまり奴隷とか囚人とか人質という社会的地位を有していた、様々な出身の多くの民族を指していた。逃亡後、共に「ヘブル人」を構成した逃亡奴隷および他の逃亡者達は、荒野における自然や人間の危険にも生き延びようとすれば、共同体のための強制的な基盤を必要とした。エジプトの侮辱を共に味わい、また解放への願いを共に持ったヘブル人にとって、出エジプトはもう一つの共通の体験となった。

古代の近東において、宗教と共同体は同じ広がりを持っていた。従って、逃亡者達は、宗教において一体化したならば、初めて一体化した共同体となることができた。親族関係に根ざす、相互に有機的な関係を欠く様さま

な民族は、共通の先祖神や特定の地域の神または神々の下で、一体化することができなかった。彼らは彼らの共通の体験の原因である神、つまり歴史の神の下で、初めて一体化することができた。民族的に多種多様な諸集団を一体化させるための新しい基盤は、十戒の序文に明言されている。つまり、「私はあなたがたをエジプトの地から、奴隸制の下から連れ出した主、あなた方の神である。あなた方は私の前に置くべきどんな他の神々をも持つてはならない。なぜなら、私は主、あなた方の神、ねたむ神であるからである」(出エジプト記 二〇〇二一五)。

唯一神論的な排他主義の起源となるヤハウエの排他的な礼拝に対する主張は、宗教的および政治的な結果をもたらした。統一思想とは異なり、それはイスラエルと神との関係を、自然で有機的というよりも、条件的で人為的なものにした。シナイにおける契約に似た近東の宗主権協定には見られることだが、神は神に忠誠を誓う人々に保護を与えたり、留保したりするための条件を規定される。<sup>(10)</sup> こうして、神が申命記28章において二者択一的に約束し誓っている祝福と恐ろしい呪いは、シナイ契約それ自身の条件的な性格の詳述にすぎない。シナイ(契約)はまた、ヤハウエ礼拝を受け入れた人々を新しい共同体へ統合せしめ、彼らを分裂させる先祖神崇拜に彼らがまいるのをくい止めた。ヘブル人達が一体化した後で、彼らは自分達が初めから親戚であったと主張し、回顧的に彼らの新しい神から彼らの先祖神への継続性の要素を読み返すことは自然なことであった。アブラハムの神、イサクの神およびヤコブの神はシナイの神と同一であると受け取られたのである。<sup>(11)</sup>

過去との根本的な断絶に始まる宗教の主要な社会的機能は、何も持たない人々のために、あるいは、自分達の生活状況になんら関連性のない共同体を継承した人々のために、(新しい一つの)共同体を造るといふものである。<sup>(12)</sup> シナイ契約の宗教はこの現象の実例である。初代キリスト教やイスラム教もまたそうである。キリスト教においては、ローマ帝国の町々に互いに近接して住んでいたが、以前には互いに見も知らなかった人々にとって、イエ

1.1  
2.5  
5

ス・キリストは統一の基盤となったのである。パウロの書簡にこのことが表現されている。つまり「ユダヤ人とギリシヤ人、奴隸と自由人、男と女のようなものはない。なぜなら、あなた方は皆キリストにあって一人の人であるからである」(ガラテア人への手紙 三章(三六節))。

36

28

タルソのパウロのころまでには、神とイスラエルの関係に本来備わっている、より古い、人為的で政治的なイメージは弱められるか、あるいは、父としての神のイメージに従属せしめられてしまっていた。イエスが神を「アバ」(マタイによる福音書十四(二六))と呼んだ時、彼はその同時代の人々の間で共通した神の理解を独特の親しい仕方で表現したのであった。にもかかわらず、ユダヤ教が(天)父に対する従順を神との正しい、救いの関係と見なしていたとすれば、タルソのパウロは、キリスト教徒になった後、いや、ひょっとすると、回心前さえも、そのような従順は不可能であり、人間は、神の恩寵によって助けられなければ、その不従順の報い——それはもちろん死である——を受けるように定められていると確信していた。パウロは、(天)父に対する不従順は究極的には唯一の罪であるという点で、ユダヤ教と同意見であったけれども、死は、イエス・キリストによる死に至るまでの正義の従順により克服されてしまったのであり、「多くの兄弟の長子」(ローマ人への手紙 九(一三))であるキリストとの信仰による一体化によって人間は救われ、死も克服されることができると彼は確信していた。

29

(天)父に対する従順というよりも、御子との一体化を救いの根本原理とすることにより、パウロはユダヤ教の家父長制を拒否し、初代キリスト教の兄弟愛の原理を神学的に公式化したのである。これは明らかに割礼と洗礼との違いにみられる。割礼は地上の父親が技術的に儀式を行うことが義務づけられている世代間の儀式である。(ユダヤ教の律法は父親が彼の代理人として、彼のために働く、訓練された宗教的な役人、モヘルを任命することを

二・11513

許していた。)この行為は家父長制ばかりでなく、家父長的な世代の連続をも肯定している。これに対して、洗礼は人の古い家父長的な自己に死に、御子を通して、世代の連続を超越する新しい兄弟愛の自己に新生することである。洗礼に関して、パウロは次のように書いている、つまり「彼にあって、あなた方は人間の手によらず、その肉の体を完全に脱ぎ去ることによって割礼を受けたのである。これが、キリストによれば、割礼なのである。あなたがたが洗礼を受けた時、あなた方は彼と共に埋葬されたのであり、洗礼によって、あなた方もまた、あなた方の信仰により、彼を死から引き上げられた神の力において、彼と共に引き上げられたのである。あなたがたは罪人であり、割礼を受けていなかったもので、死んでいた。彼(父なる神)は彼と共にあなた方を生へと連れてきてくれたのである。なぜなら、彼は私たちのすべての罪をゆるして下さったからである」(コロサイ人への手紙二

ノ十一一十三)

三・28

一〇・26

パウロにとって、キリスト教徒同士の関係は、性や国籍や階級を超越した兄弟愛の関係である。「というのは、ユダヤ人もギリシャ人もなく、くびきも自由もなく、男も女もない。なぜなら、あなた方は皆キリスト・イエスにあって一つであるからである」(ガラテア人への手紙 三ノ二十八)さらに、統一思想とは異なり、初代キリスト教は明白に反家庭的な偏見を持っており、その最も説得力のある例はルカ伝に見出だされ、そこにおいてはイエスが「もしだれでもその父、母、妻、子供、兄弟、姉妹、そうだ、そしてその命をも憎むことなく私のもとに来るならば、その人は私の弟子になることはできない」と言ったと叙述されている(ルカによる福音書十四ノ二

十六) 同十六ノ二十八ノ三十 参照、マタイによる福音書十ノ三十四一三十九。イエスとパウロの両者の経歴は

十・34539

イエスとパウロは家父長制を拒否するかもしれない。なぜならば、彼らは彼らが真の父とみなすお方、つまり

神を見出だしたからである。こうして、パウロは宣言する、「我々がまだ幼かったころ（つまり、キリスト教徒となる前に）、我々はこの世のもろもろの靈力の下に縛られていた者であったが、定められた時が来た時、神は律法の下にある者を贖い、我々を養子とするために、御子を送って下さった。あなた方が子であることの証明は、神が我々の心に御子の靈、つまり、「アバ、父よ」と叫ぶ靈を送って下さったということである（ガラテア人への手紙四〇四一六、ローマ人への手紙一四一七参照）。ちょうどロックにおける兄弟愛がこの世の父の否定と天父の肯定を必要としたように、パウロと初期キリスト教においてもまた、同じ否定と肯定が必要とされた。

キリスト教は兄弟愛の問題に関してユダヤ教と袂（たもと）を分かったのには十分な理由があった。実際、ユダヤ教自身は、来たるべき世界において、兄弟愛の原則が広まるということを肯定していた。ラブ（Rab）によれば、「来たるべき世界はこの世のようではない。来たるべき世界には、飲み食いはなく、子供を生むことも商売もなく、ただ正しい人がその頭に冠を被って王座に着き、シエキナーの輝きを楽しむのである」。ユダヤ教は、世代の連続と生殖の過程が継続する、贖われていない世界の宗教である。初め、イエスもパウロも共に自分達は（男女の）性差がもはや問題にならない（なぜなら、罪と墮落の最もおそろべき死に打ち勝つためには生殖はもはや必要なかったから）贖われた世界に生きていると見ていた。罪のない世界においてはもはや父性や子供の出産の必要はない。なぜなら、正しい人は神の面前で永遠に生きるだろうからである。

我々が知っているように、父性やヒエラルヒーがまもなくキリスト教の中に位置を与えられるようになった。贖いは原則的には起こったかもしれないが、人間はなおも生殖の世界、罪および秩序の必要性の中に生きていた。にもかかわらず、ユトーピアのビジョンは決してなくならなかった。ヘンドリックス博士も指摘するように、我々はそれをロックに見るのである。我々は他のところにも、つまり、フランス革命とロシア革命においても、また

副次的には、一九六〇年代の反体制の熱情のいくつかにおいてもそれを見てきた。生殖や出産や世代の連続を拒否する同じユトープピア的な傾向は、現代のゲイおよびレスビアン運動に本来備わっていると私は確信している。それぞれの歴史的な事例において、兄弟愛の再肯定の後には家庭の再肯定と人間問題における秩序の追求がこれに続いて起こる。我々はゲイおよびレスビアンの運動がこれからどうなるか、まだわからないでいる。

統一思想の未来の倫理社会像は確かに新しいビジョンを提示している。贖い、つまり、罪の克服とユトープピアのビジョンは、ロックと初期キリスト教の場合にそうであるように、親の地上的な役割の否定とはならない。例えば、共産主義の最盛期において、子供は党のユトープピアの約束の美名において、その父母を裏切るよう奨励された。統一思想の善なる社会のビジョンと初期のキリスト教のそれとの間には根本的な差異がある。統一思想のビジョンは地上的なビジョンであり、従って、四位基台の必要性と神的な、夫婦の愛、父母の愛、および子女の愛の肯定である。

しかし、私はヘンドリックス博士や他の統一思想の解説者に考えてもらいたい、いくつかの未解決の問題を持っている。

(1) 統一思想は家父長制と兄弟愛という二つの典型をいかに扱うのか。我々が見ることができるよう、兄弟関係をより支持して家族関係を拒否する強力な宗教運動があるのである。

(2) 我々が見てきたように、契約は、諸民族の分裂を克服するために設けられた考案物である。これらの民族は自分達のことを、共通の過去を持たないけれども、一つの共同体として共通の未来を持つとうと誓約し合っていると見ている。この契約は、ホップズ、ロックおよびアメリカ憲法における社会契約に対する、聖書的なルーツとなっている。統一思想は同じ種類の統一を達成する、代わりの、現実的な方法を持っている

るであろうか。もちろん、統一教会のメンバーはその統一を見出だしているが、人類において、争いあっている民族たちの間に統一思想はいかにこの統一を造り出すことを提案するのか。

- (3) 契約は、有機的に一体化していない多民族が一体化するための非有機的な戦略である。究極的には、ロックが夫婦社会と市民社会とを区別したのはこのためである。ある意味で、市民社会は互いに見知らぬ者同士の社会である。アダム・スミスを読んだヘーゲルは、市民社会を『法の哲学』において「普遍的なエゴイズム」の世界とまで指摘した。統一思想はどのように、われわれが現在おる所（立場）から、我々がみな「神の愛を中心として互いに愛し合う兄弟姉妹」となっている所（立場）にまでたどり着くことを期待するのか、私にはわからない。

最後に、ヘンドリックス博士に、思想を刺激する、刺激的な論文について感謝を表したいと思う。

注

- (1) John Locke, TWO TREATISES OF CIVIL GOVERNMENT (New York, Everyman's Library, n.d.), pp. 6-7.
- (2) Locke, OP. CIT., p. 92.
- (3) Locke, OP. CIT., p. 119, 120.
- (4) Norman O. Brown, LOVE'S BODY (New York: Vintage Books, 1966), p. 7.
- (5) Aristotle, THE POLITICS, trans. T. A. Sinclair (Baltimore: Penguin Books, 1962), Book I, Chapter 2, p. 26.

- (9) Aristotle, *OP. CIT.*, Book I, Chapters 2-5, pp. 27-35.
- (7) Plato, *REPUBLIC*, II, 367E-372A.
- (8) Fustel de Coulanges, *THE ANCIENT CITY* (New York: Anchor Books, 1956), Book IV, ch. XIII, p. 459.
- (9) George Mendenhall, *THE TENTH GENERATION: THE ORIGINS OF THE BIBLICAL TRADITION* (Baltimore: Johns Hopkins University Press, 1973), pp. 19ff.
- (10) Mendenhall, *OP. CIT.*, pp. 14-16.
- (11) Gerhard von Rad, *OLD TESTAMENT THEOLOGY*, trans. D. M. G. Stalker (London: SCM Press, 1975), Vol. I, pp. 3-14.
- (12) Montgomery Watt, *MUHAMMED AT MECCA* (Oxford: Oxford University Press, 1953), pp. 151-53.
- (13) 長井謙哉 Richard L. Rubenstein, *MY BROTHER PAUL* (New York: Harper and Row, 1972) 249-252 頁
- (14) Rubenstein, *OP. CIT.*, pp. 69-77.
- (15) Babylonian Talmud, Berakoth, 17a.